



発行

(財)東京都生涯学習文化財団

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033

多摩市落合1-14-2

☎ 042-373-5296

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 55 平成14年7月1日 <http://www.tef.or.jp/maibun/>

ふる里からきた土器たち

遠くのむらとの交流



▲ (左上) 常設展示パネル

▲ とうきょう親子ふれあいキャンペーン (右上) 泥面子作り、(右下・左下) 火おこし

広報普及事業の充実を

所長 高橋 貞美

4月、5月は、当センターへの小学校六年生による団体見学が多く、子供たちの話し声や良い音色を出すという事で展示されている讃岐石を叩く音等で一気にセンター内が活気づきます。

5月19日(日)には、遺跡庭園で縄文土器の野焼きが行われ、その模様は、多摩ケーブルテレビが取材し、多摩地域に週間ニュースとして放送されました。

また、6月8日(土)には、遺跡庭園、センター会議室を会場として、とうきょう親子ふれあいキャンペーン「火おこし体験と遺跡庭園・縄文の村の探索」が開催されました。2倍近い競争率の中から抽選で選ばれた42組105名の親子が火おこしと泥面子作りに挑戦し、みごと全組が火おこしに成功しました。埋蔵文化財の調査研究成果の広報普及事業は、その成果を都民に還元するという意味で重要であります。

さらに、広報普及事業は次のような役割を担っていると、私は考えております。

前記事例からも分かるとおり、広報普及事業は、直接都民と職員が接触する場を設定することから、職員が自らの仕事の成果を自分の目と耳で確認することができ、そのことが、仕事の活力源となります。また、都民の視線を感じ、そこに緊張感が生まれることから、都民の視点でものを考えるということも、仕事の改善につながります。

このような重要な役割を担う広報普及事業は、本年度においても、重点事業として、益々充実が図られなければならないと思います。

遺跡だより ⑥3



1号住

は貝塚の記念碑が建てられています。が、今までに本格的な発掘調査が行われたことはなく、いわば幻の貝塚として永い間眠っていました。

今回の調査でも、遺跡の主体は江戸時代のものでしたが、調査の終了間際になって、江戸時代の遺構に壊されながらも、貝塚を伴う縄文時代の住居跡が2軒発見されました。

住居跡は今からおよそ6千年位前のもので（縄文時代前期）、一辺が約4mの方形の竪穴住居の中から、縄文土器とともにハマグリやアサリなどの貝が見つかっています。また、土器の中には山梨方面から運ばれてきた土器なども含まれています。

縄文時代には、本郷台地の前面まで海が入り込み、縄文人の食料となっ

た貝の採取が行われていたようです。この台地上にはお茶の水貝塚以外にも湯島切通貝塚や小石川植物園内貝塚など多くの貝塚が点在しています。

貝層の分析結果で猪の歯や魚骨が出土していることが判明しました。

江戸時代

江戸時代の遺構としては、地下室（ちかむろ）が多数検出されている他、土坑やピットなどの遺構がところ狭しと発見されました。なかでも、地下室は麴ム口と考えられますが、一九三四年に今の東京医科歯科大学の基礎工事中に発見された穴を古墳群であるとして新聞に報じられた経緯があり、その後は考古学界で遺構の性格についての論争が展開されました。

今では構造や他の遺跡の検出事例などから、麴ム口として考えられています。

麴ム口は縦坑（出入り口）とそこから横に掘られた横穴とからなっていて、平面形態は羽子板状を呈しています。

江戸時代の本郷・湯島には数多くの麴屋があり、当時は麴の大生産地であったことが知られています。今回の調査は、前述の検出地点から北に100mの地点にあたり、湯島一帯の地中には麴ム口が多数存在していた

ことが推測されます。本地区の麴ム口は廃絶後にゴミ穴として転用され、大量の陶磁器や貝などが捨てられています。

遺物は陶磁器・土器・瓦・金属製品・木製品・硝子製品などで総数1万8千点を超え、時期的には17世紀代のもものありますが、ほとんどは18世紀のものが主体となっています。今後、7月まで整理作業を行い、秋には報告書の刊行を予定しています。（小薬一夫 主任調査研究員）

竹尾 進 主任調査研究員

写真は

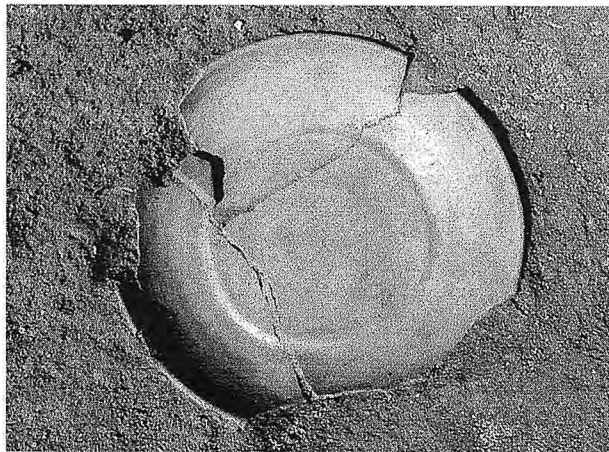
上段 一号住居跡 土器出土状態

中段 二号住居跡全景

下段 胞衣皿出土状態



2号住



胞衣皿出土状態

今回の発掘調査は文京区湯島一丁目に所在する三楽病院若葉寮の建替え工事に伴う発掘調査です。調査面積は315㎡で、調査期間は平成14年2月18日から3月29日まで行われました。

本貝塚の研究小史

遺跡名の由来となっている「お茶の水貝塚」は、明治24年、神田川にかかるお茶の水橋の工事の際に、縄文時代の土器片とともにアサリ・ハマグリ・カキなどの貝殻が発見され、そこに遺跡があったことが古くから知られていました。

その後、昭和27・28年頃、東京医科歯科大学の増築工事により敷地内の各所に貝塚が点在していることがわかりました。現在病院の敷地内に

文化財講座 <45>

大江戸掘りもの帖 ~二十二~



記録の作成

また、これらの生活面には建物の礎石、屋

分はコンクリートを剥すと関東大震災で被災した神田山本町などの町割が確認されました。さらに下層では、明治時代の山本町や幕末から江戸時代初期の生活面が8面見つかりました。

外神田四丁目遺跡(その2)
当地は大正12年の関東大震災被災地で、昭和3年から昭和63年まで神田青果市場が開設されていました。今回は、この地の再開発事業に伴って調査が行われました。

市場のうち建物があった場所は、基礎工事が地中深くまで及んでおり、調査はできませんでしたが、通路部

敷や道路境の石垣、溝、井戸、上水施設、石積みで護岸した大規模な屋敷内の池跡が見られます。



遺構確認作業

特異な資料としては、江戸時代の埋め立て層中から縄文時代の土器や石器が含まれた貝塚かと思われるものが発見されましたが、その後の調査で、貝層中から江戸時代の陶磁器などが見つかり、当地の埋め立て時に台地上の縄文時代の貝塚の貝層を埋め立て用に掘崩し、当地に運んだものと考えられるにいたりました。

調査で出土した資料は、陶磁器や素焼きの焼物が主体ですが、漆椀などの漆器類、下駄、曲げ物、桶、櫛

などの様々な木製品、刃物、飾り金具、キセル、銭の金属類、動物の骨や角の加工品、当時の人々が食用にした貝の殻や植物の種なども大量に出土しています。

保存科学室(ぼれ話(十九))

彩色土器に見られる赤と黒(2)

先回の門倉氏による多摩ニュータウンNo.243遺跡出土の彩色土器(図1)について、再度考えてみます。

門倉氏によると彩色されている面の樹脂が、うるし科のうち、所謂うるし以外の樹脂が使用されている可能性が指摘されている。ここでは、土器の樹脂の断面を走査型電子顕微鏡を用いての断面

写真とエネルギー分散装置による元素分析をおこないました。

図2による分析の結果によると、鉄以外の元素は、

土器の胎土によるものであり、鉄は酸化化合物

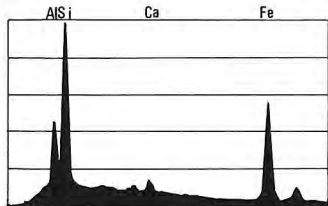


図2 赤色部のX線分析スペクトル

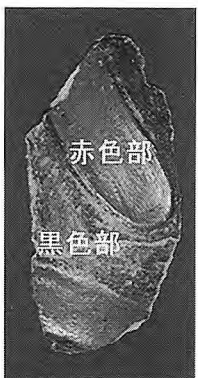


図1 彩色土器

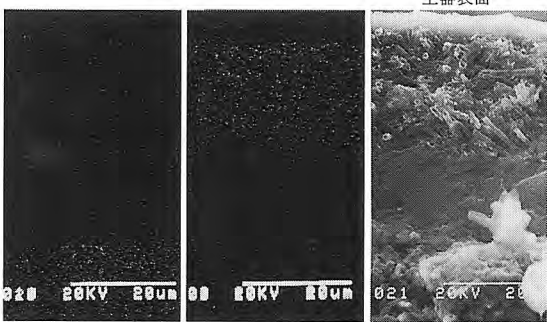


図3 土器表面の断面分析(×1500倍)

今後は、これらの調査成果をまとめ、江戸時代のはじめから近代にかけての当地の変遷と人々の暮らしを明らかにしていきたいと思えます。

(及川良彦 主任調査研究員)

物によるパイプ状物質の赤色顔料であった。さらに、断面観察をすると土器胎土の表面には、最初はススなどの黒色物質、その上に樹脂、パイプ状物質の赤色、さらに樹脂を重ね塗りをした状態が観察され、結果として赤や黒を樹脂にねりこんだものでなく、サンドイッチ状に重ね塗りしていることが判明した(図3)。

(上條朝宏 主任調査研究員)



展示ホール見学風景

平成十四年度は、「ふる里からきた土器たちー遠くのむらとの交流ー」というテーマでおこなっています。北は青森県・西は岡山県に至る地域で出土する土器と同様な土器が多摩ニュータウン内の遺跡からみつかっています。また黒曜石などの石材は神津島や長野県の諏訪周辺地域から運ばれたものが展示してあります。ふる里から運ばれてきた資料が見つかるかどうか、見学にいらしてください。また、隣接する遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代中期の植生を復元した森が青々と繁茂しています。

平成14年度の展示

日本学術振興会
科学研究費補助金の交付

当センター川田壽文調査研究員「日本砥石の史的研究所」が内定。

4月以降、次の5分室が開設され、現在、合計20分室で発掘調査・整理作業を行っております。

分室の開設

平成14年度広報普及事業のご案内(7月~)			
日	時	行事名	内容
7/13(土)	13:30~16:00	第1回文化財講演会	演題「石材からみた旧石器時代と縄文時代」 講師 柴田 徹(有限会社考古石材研究所)
8/ 8(木)	9:15~16:00	縄文土器作り教室	縄文土器製作と野焼きを全3日間で 参加費1,000円 小学5年生以上(小学生は保護者同伴)往復はがきで応募 7/18必着(多数の場合は抽選)
8/ 9(金)	9:15~16:00		
9/ 7(土)	9:15~16:00		
9/11(水)	13:30~16:00	第2回文化財講演会	演題「縄文時代中期の集落-No.939 遺跡からみてー」 講師 松井和浩(当センター調査研究員)
10/12(土)	13:30~16:00	第3回文化財講演会	演題「実験考古学の楽しみー覆い焼などの復元からみてー」 講師 久保田正寿(青梅市郷土博物館)
10/26(土)	13:00~16:00	とうきょう親子ふれあいキャンペーン	火おこし体験と泥面子作り、遺跡庭園「縄文の村」の探索 小学生と保護者対象(応募者多数の場合は抽選)
11/ 9(土)	10:30~16:00	映画鑑賞会	午前:小・中学生向け(未定) 午後:一般向け(未定)
11/30(土)	13:30~16:00	第4回文化財講演会	演題「アンデス古代の神殿の発掘と修復」 講師 大貫良夫(東京大学名誉教授)
1/15(水)	13:30~16:00	第5回文化財講演会	演題「土中文化財の保存と公開-虎塚古墳からみて-」 講師 門倉武夫(当センター保存科学室)
2/12(水)	13:30~16:00	第6回文化財講演会	演題「江戸と国元ー尾張藩上屋敷跡遺跡出土資料からみてー」 講師 内野 正(当センター副主任調査研究員)
平成14年度 常設展示 「ふる里からきた土器たちー遠くのむらとの交流ー」			
平成14年度 終了の行事	・縄文土器の野焼き 5/19(日) →見学者 70名 ・親子ふれあいキャンペーン「火おこし体験と泥面子作り他」 6/8(土) →参加者 42組105名 ・映画鑑賞会 6/22(土) →参加者 105名		



古紙100%配合の再生紙
を使用しています。

4月の人事異動で
太田 寛(総務課長)、原田博明(経理係長)、岡崎完樹(調査研究部係長)、関 憲弘(調整係)が転出し、尾崎眞幸(所長)、川橋義夫(管理係)、高橋明子、佐久間静子、三橋透(都嘱託員)が退職しました。後任に、高橋貞美(所長)、土田立夫(総務課長)、植松和光(経理係長)、可児通宏(調査研究部係長)、塚本敬(調整係)、後藤如子(管理係)、斎藤春樹、中谷章子、大根田 亮(都嘱託員)が着任しました。
また、4月1日付けで、調査研究部係長に竹尾 進が就任しました。

人のうごき

- 西台分室 千葉基次係長
小松眞名
- 赤羽台分室 館野 孝係長
飯塚武司
- 箱根ヶ崎分室 竹尾 進係長
内野 正
- 大橋分室 竹尾 進係長
小葉一夫
- 蓮根分室 館野 孝係長
山口慶一、武井利道